

子ども、父母参加の学校づくり

多様で豊かな繋がりから始まる学校づくり

廣田 健

今年度の分科会では、八本のレポート（うち二本が非公開）が出され、検討・討論がなされた。以下、そのレポートの内容に沿いながら、論議の様子を報告する。

一 レポート内容の紹介と論議

1 学校をめぐる状況と学校づくりの課題

八木博氏からは「学校づくりをめぐる現状と課題について」という報告がなされた。これは、全国学力テストにおける北海道の平均点の都道府県順位が高くないことを受けて、道教委が進める「学力向上に関する総合実践計画」に代表される「学力向上」政策に対して、子どもの現実と地域に根ざした教育の

大切さを対置したものであった。数値で測れる学力だけを追求した場合に、結果がすべてとなり「0か100かの子育て」になってしまうこと、またあらかじめ定めた目標への達成だけを基準とした場合には、その基準に沿わない子どもたちを排除することになることが論議された。子どもの行動には、必ず「わけ」があり、それを一人ひとりに寄り添って読み解いていくことが、真に子どもの成長発達を促す教育となることが強調された。

ところが、こうした地域の実情を反映した寄り添う教育が、新自由主義を背景とした競争主義の導入によって、職場や地域の中に軋轢を生み出している事実についても指摘があった。非公開レポートの中では、こうした競争主義の横行の中で、子どもの行動の理由を問わない「強い指導」、学習のモチベーションを問わない「画一的指導」を推し進める教員も増えている事実も言及されており、国・道もこの不寛容政策を支持する傾向があることが問題視された。

2 多様なつながりから始まる学校づくり

この様な人々の絆を断ち切ろうとする動きの中で、様々な形での繋がりを創り、学校づくりを進める取組みもなされている。

越前秀一氏からは「若い教師を支える」と題して、本来は管

理を強化する意図のもとに作られた主幹教諭の職を「若い教師の支えとなる」と位置づけ、学校における繋がりの中核となり、教職員全体が問題を率直に話し合える環境を作り出す取り組みが報告された。こうした同僚性の向上には、フォーマルなシステムの部分だけでは無く、時には「愚痴」を聞く機会を作るなどのプライベートな側面（インフォーマルな面）も重要であることが論議された。

また、今年度、特徴的であったのは、養護教諭による学校づくりの取り組みであった。国保いずみ氏は「大津の『いじめ・自殺』事件を受けて」、笹谷亜紀子氏は「父母とつながって」と題して、教職員・父母との学校づくりの取り組みが報告された。

国保報告では、痛ましい事件にショックを受けている児童・父母に対して子どもへの読み聞かせや保健だよりを使って「事件の受け止め」を行うと共に、専門性を生かして教職員研修や地域講演会を行ってその対応を学び合う関係を作り出した。

笹谷報告では、父母が子どもの成長発達に伴って疑問に思う様々な問題（例えば、テレビゲーム、性教育、生活リズムの問題等）をこまめに取り上げた保健だよりを作成してその不安を取り除いたり、学童保育の先生とつながり子どもの生活をトータルにとらえて個別の指導に生かす等の取り組みを行った。

これらの取組みに共通するのは、学校の様々な職員の教職員が共同し、父母や地域の人々が抱える子育て上の問題に対して

細やかに答えることで、父母や地域が一体となって学校や子どもたちを育てていることである。論議の中では、国・道の政策が「点数」を基準として比較・競争する教育を進める中で、学校の中で子どもを唯一「点数」によって評価することのない養護教諭の位置がこれまでになく重要になっていることが指摘され、「いまや保健室から学校づくりが始まる時代」との評価も聞かれた。

3 学校づくりを支える学び

分科会では、こうした国・道が進める政策の中での歪みが指摘されたが、学校づくりを支える学びの必要性についても報告がなされた。

一つは、松林洋氏による「生徒による学校づくり―深川西高校と上磯高校に学ぶ」と題して、両校の歴史をたどりながら、生徒中心の学校づくりとはどんなものだったのか、あるいはこれを支えた教職員の動きはどのようなものだったのか、当時の社会的・政治的・政策的背景はどんなものだったのかについて、詳細な資料を用いながら検討した報告であった。紙面の都合で、詳細な内容について報告することはできないが、学校の自治と生徒参加の流れが詳しく説明された報告であった。この

報告のきっかけは、報告者が六〇周年記念誌を作成するに当たって、自治の流れとそれを抑圧する政策に対して批判的に取り扱った部分が、管理職の意向で削除されたことであった。この出来事からも、自治や生徒参加の流れについて国・道のが否定的評価をしていることの影響を見ることができる。

渡来和夫氏は、『北海道学』学校設定科目の取り組み―その二』を報告された。同氏は、地域に根づいた学校を、いわゆる学校行事の中で取り上げることだけでは無く、学校におけるメインの活動である教育内容そのものの中に取り入れる工夫をした報告である。学校設定科目に「北海道学」を設定し、「北海道の文化・自然などを体験的学習を通じて学ぶとともに、北海道の自然・環境等を総合的に学ぶ」ことを目的とするもので、「ほっかいどう検定」の合格を一つのモチベーションとし、地域のような団体等と協力し、教科内容を創るとともに、その席に子どもたちも参加させて、子ども参加と地域づくり。学校づくりを実現する取組みであった。

二 総括討論と来年度の課題

これらの報告を受けて、総括討論の中では、それぞれの専門

性と得意分野を生かしながら、様々な職種の教職員が共同して学校づくりに取り組むことの重要性が改めて確認された。特に、保健室からの報告を受けて、点数で比較・競争させるだけの教育・「強い指導」の問題点が指摘されると共に、子どもの行動一つひとつの意味を考え、子どもや地域の実態に沿った教育を行うことの重要性が指摘された。

また学校づくりを支える教職員の同僚性を高め、地域・親子のもと子育てに関する不安にもこまめに対応することで、父母や地域の人々が主体的・積極的に参加する学校づくりが実現することが確認された。

(北海道教育大学釧路校)